

日本人は日本語で考える？

原野 昇

1 言語記号の恣意性

窓から外を眺め、「犬がいる」、「猫がいる」、と言うのは日本人（日本語を話す人）だけである。別の言語では「犬」と「猫」を一緒にして「犬猫」という概念をこしらえ、それを「イネ」と呼んでいるかも知れない。その言語を話す人は、どちらを見ても「あ、あそこにイネがいる」と言うであろう。具体的な例で示せば、英語では、

(1) There is a tree in the garden.

(2) This desk is made of wood.

と言うが、日本語では、

(1) 庭に一本のキが生えている

(2) この机はキでできている

と言う。日本語では「木」という概念をこしらえ、それを「キ」と呼んでいるが、英語では、「tree」という概念と「wood」という概念を別々の概念とし、前者を「tri:」、後者を「wud」と呼んでいる。英語では、片や年々成長する生命活動体であり、片や材料としての物質として区別しているが、日本語ではそのような特徴は無視し、机の材料も森に生えている木も元をただせば同じもの、ととらえている。

概念は、個々の対象の特殊性、相違点には目をつむり（捨象し）、普遍性、共通性に目を向けて（抽象し）形成される。たとえば、個々の机を見れば、大きい机もあれば小さい机もある。木でできた机もあればスチールでできたものもある。引き出しのある机、無い机、腰掛けを使用して使う机、畳の上で座して使う机もある。それらの相違には目をつむり、足があってその上に天板が取り付けられてあり、本を読んだりものを書いたり、あるいはその他の作業をする用のために作られたもの、という共通項に目を向けて「机」の概念は形成されている。

その際、どのように大きな相違点に目をつむっても、どれほど小さな共通点に目を向けてもよい。これが言語記号の恣意性の意味するところである。たとえばフランス語では「稲」、「米」、「ごはん」という概念はこしらえず、それらすべてを一つの「リ」riz という概念で対応している。「稲」と「ごはん」ほどの（日本語話者にとっては）大きな違いに目をつむってもいいのである。また、日本語の「アニ」や

「オトウト」という概念は、ある基準の人よりも先に生まれたか後に生まれたか、すなわち生まれた順番という特徴に目をつけて概念が形成されている。生まれた順番という特徴は、色、形、材質、大きさ、用途などの特徴と違って、外からは見えない。したがって「アニ」や「オトウト」という語は、生まれた順番を知っている人にしか使えない単語なのである。

このように、概念を形成することは、個々の対象の間の共通項をみつけ、その共通項で多くの個体をくくって認識しようとする人間の営為である。共通項でくくった一つの範疇をたてることは、すなわち別の範疇と区別することであり、相対化することである。それは人間が人間を取り巻く茫漠の世界、混沌の世界に対処しようとする生物的本能に由来する。それを分類本能と呼ぶこともできよう。

発話者（表現主体）は個々の対象（時枝誠記の言う「素材」）に接し、それを自分の中で形成されている概念のうちのどれに一番近いかを判断し、その対象をその範疇に分類する。（時枝の言う「概念化」の過程）それが言語活動の第一歩である。たとえばここに円とも三角形とも六角形とも見えるような曖昧な図形があるとす。Aさんは「それは円です」と言い、Bさんは「それは三角形です」と言い、Cさんは「それは六角形です」と言うであろう。すべてその曖昧な図形を見て、それが自分の概念体系のうちのどの概念に一番近いかを判断し分類した後に発話が生み出されているのである。メルロ・ポンティのことばを借りれば、「対象に名前をつけるはたらきは、対象をそれだと認知する作用のあとにやってくるのではなく、認知作用そのものである」（『知覚の現象学』）ということになる。

人間は集団で生活しているが、全人類が一つの集団ではなく、いくつかの集団に分かれている。個々の集団内では構成員（個体）は多くの面で生活を共有しているが、他の集団とは環境が異なっている。一つの集団内において世界の相対化は構成員によって共有されるが、他の集団構成員とは共有されない。世界の相対化（概念形成）が共有されている集団が言語集団である。その集団ごとに、どのような共通項に目をつけて一つの範疇（概念）を形成し、他の範疇と区別しているかが異なる。混沌の世界に切れ目を入れる、その切れ目の入れ方が異なっている。先に指摘した言語記号の恣意性の意味するところである。

その際、多くの言語集団で共通して入れられる切れ目もある。たとえば多くの言語集団で、「人間」とそれ以外の間に切れ目を入れている。それは人間の世界認識の仕方において、個別の集団を超えた一般性、共通性、普遍性も指摘できるからである。と同時に個々の集団ごとに固有な切れ目の入れ方、固有な世界認識の仕方もある。集団ごとの生活圏、環境が異なることに由来することが多い。

2 語彙と民族

ある特定の意味分野の語彙を言語集団ごとに比較すると、多くの差、集団ごとの特質が指摘できる。よく引かれる例であるが、アラビア語ではラクダに関する語彙が、イヌイット語では雪や氷に関する語彙が豊富だと言われる（ただし数え方にもよる）。アラビア語を話す集団においてラクダが、イヌイットにおいて雪や氷が、いかに生活に密着しているかを如実に示している。生活に密着した意味分野では、切れ目の入れ方が細かくなっているということである。一般に語彙はその集団の環境を非常によく反映している。

各言語集団ごとにどの意味分野の語彙が豊富かを手っ取り早く知るには、分類語彙表やシソーラスが便利がいい。それらを基に、日本語ではシグレ、コサメ、ヒサメ、サミダレやソヨカゼ、コガラシ、ハルイチバンなど自然現象、言い換えれば花鳥風月や雪月花に関する語彙が豊富だと指摘されることもある。ただし、一つの確たる結論を出すには慎重でなければならない。

ある分野の語彙が豊富だということは、その分野により細かな切れ目が入れているということであるが、切れ目が入られるということは何らかの分類基準にしたがって範疇分け、部類分けがなされているということである。範疇分けがより細くなされているということは、その分野の対象がより細かく観察されているということである。ある言語集団において、特定の分野の範疇分けが他の言語集団よりより細くなされているということにはそれなりの理由があるであろう。その言語集団（民族）を取り巻く自然的・社会的環境のみでなく、場合によってはその集団の世界観が反映されている場合もあるであろう。異なる言語集団はそれぞれ異なる世界像を有しており、それが言語に反映されているとみるのが有名な「サピア＝ウォーフの仮説」と呼ばれるものである。その考え方に従えば、言語を研究すればその言語集団の世界像が明らかになる。言語のなかでも語彙は、それを明示するのが比較的容易な分野、ということになるであろう。しかし現実はいそれほど単純ではない。「仮説」と呼ばれるゆえんである。

3 言語と思考

この問題は、人間の思考活動と言語活動とはどのような関係にあるのかという問題にもつながるであろう。言語がなくても思考は可能であろうか。この問題に関しては古来から種々議論されてきた。

言語と思考を切り離して、「言語は思想伝達の道具である」といった言い方は、言語をまるで水を送る水道管のようにイメージさせるものであり、問題であることは

言うまでもない。水道管は水とは別に歴として存在しているが、言語はそのようなものでは決してない。泉井久之助は「一定の言語によってその使用に任ずる人々の精神の形態までも一定の形態として規定し去ろうとするのは、たとえば一定の水甕の形をもって水の本来の形とするようなものである」(『言語の世界』)と言っている。

言語なしの思考は可能であろうか。たとえば朝起きて外出するに際し、数着の服のなかからある一着を選んで着たとする。それは、仕事で会社に行くのか友人と食事に出かけるのかなど、外出目的、外出先などの状況が考慮された上で、ある一つの判断がなされた結果の行動である。判断をくだすことは広い意味での思考と考えることができるだろう。この着衣の選択の場合、そこに言語がどれほど関与しているであろうか。

この場合、長い熟考の後選択という行動に移される場合もあるが、反射的、瞬間的に選択される場合もある。後者の場合は習慣化した行動なので、知的エネルギーを注いだ狭い意味での思考とは言えないかも知れない。前者の場合には、言語なしの思考は難しいかも知れない。泉井は次のように述べている。「分節を欠く思想は未だ単なる思想の素材である。生命を帯びた無定形な心的内容が云わば星雲(nubula)の如くに躍っているだけであろう。思想はあくまでも定形的でなくてはならない。分節の経験と可能性とがなくてはならない。思想と言語性は決して離して考えられないのである。」(『フンボルト』) 泉井は「星雲の如くに躍っている」に匹敵する内容を別の場所では「精神の勢い」と呼んでいる。思想と言語性について、フンボルトは *innere Sprachform* 「内的(内部)言語(形式)」という語を用いて説明している。(同) 感嘆詞、間投詞は、精神の勢いが強いあまり、冷静な概念化のプロセスをじゅうぶん経ないまま、言語形式になったものと考えることができよう。感嘆詞、間投詞とは異なるが、擬音語、擬態語も概念化のプロセスにおいて感覚的要因が大いに関与している点では、前者との共通性が指摘できよう。

人間のかかる活動における普遍性と各言語集団ごとのあるいは個人ごとの固有性について、泉井は先の文に続いて次のように指摘している。「しかしその分節にかゝるときは思想の様式が限定されるときである。星雲としての思想の素材は或はそのまますべての人々に共通であり得るかも知れない。しかし分節を通過する際には必然的にそれぞれの民族、或は個人に固有な限定の仕方を蒙るのが一般である。ここにそれぞれの言語の区別があらわれ差異があらわれる。けれども分節する作用それ自体、純粹分節は我らの生命と共に我々一般に共通であろう。」(同)

4 同化と異化

日本人（日本語を母語とする人）は日本語でしか世界をみること、思考することができないのかという問いには、**Oui et non**「然りかつ否」と答えよう。

「否」に関しては、これまでみてきたことから必然的に導き出せる結論であろう。日本語を母語とする人が英語の **brother** や **sister** という概念に接したとき、それをじゅうぶん理解できるのみでなく、それを我がものとして自分の表現活動を行なう（使いこなす）ことさえできるようになる。また新語が毎年次々と生み出されているが、それはそれまでなかった新しい概念が形成されているということである。もしも日本語を母語とする人が日本語でしか考えることができないとすれば、外国語の理解は不可能であり、語彙の増加や語義の変容などがなく、概念体系が不変だということになる。500年前、1000年前の日本語と今の日本語を比較すれば、一目瞭然である。精神は言語よりも大きい、と言ってもいいだろう。

にもかかわらず先の問いに「然り」と答えるのはなぜか。それはこの問いに「否」と答えるためには大きな精神のエネルギーが要るからであり、生きものとしての人間は常にエネルギーの消費をできるだけ避け、最少のエネルギーで対処しようとする動物だからである。

先に例を出した外出する際の着衣の選択の場合のように、物事を認識し判断を下すという思考活動でも、それが何度も何度も繰り返されると、次第に思考活動に注がれるエネルギーは少なくなり、ついにはそのプロセスを省略して条件反射的に行動に移されるようになる。習慣化であり同化である。

この同化は生きものとしての人間の本能に由来するものである。したがって何もしないでも、繰り返されることによって徐々に習慣化（同化）するものである。これに対し、同化に逆らう異化は、人間が意識的に行なう作業であり、大きなエネルギーを必要とする。日本語にとらわれずに世界を見、思考しようとすることは異化の作業である。

知的作業、すなわち思考活動に注がれるエネルギーの視点から言語表現活動を観察すると、注がれるエネルギーの大きさはピンからキリまでであると言えるだろう。すなわち推敲に推敲を重ねた末の表現活動（詩人のそれなど）もあれば、友だちと会って「おはよ」と条件反射的に発せられる表現活動もある。そこに注がれるエネルギーの大きさは千差万別である。

現実の言語活動において後者、すなわち知的エネルギーを省略した条件反射的表現活動の占める比率は非常に大きい。生きものとしての人間の本性が向かわしめるところだからである。それゆえ窓から外を見ると、「犬」が見え「猫」が見えるのである。日本語でしか世界が見えないのである。よほどの努力をしないかぎり、よほ

ど精神のエネルギーを費やさないかぎり、日本人（日本語を母語とする人）は日本語でしか世界をみること、思考することができない、ということになる。